

樋口龍峽君

長谷川天溪

山崎

自分には龍峽氏と友人で月別懇話会があるから彼は
 言ふ事は出来ぬが強ひては人の物を一言すれば丸で事
 となすに紳士的である。随分大酒の方で恐らく一升位
 平気ならう。その上健啖で鱧井の三つ位は一度に平らげ
 る。体格は立派で一魁堂々たる同業である。
 氏の文学論は丸で専攻。社会学から割出されぬ。此
 の社会学の方面に於て氏は如何なる学識を有する
 か自分には知らぬけれども氏は其立場から文藝を論じて
 近頃は文藝研究会まで起して大に活動してゐる。随つ
 て氏の文藝に於ける態度は社会と云ふものを眼中に置
 いて社会のためを以てはふるふらぬと主張するらしいが
 一つも自説を發表せずして唯他人の提供した問題を
 捉へて其時其時に行きなりハツキリに批評する。自然主
 義に替へて思ふと及対するよに極めて曖昧な
 善く言へば中庸主義。悪く言へば筒井順庵流のその
 中心思想が批判しふいか仮に其根柢は社会のためと
 言ふとすればその社会あるものはどんなふもりの境
 て貰いたいの氏の後は畢竟社会を裨益するものと云ふ
 的の目的を有するものにて結局無意義のものに於ては世